

オットー・ノイラートにおける〈経済〉の原像

—19世紀の自然観の転換と経済学—

桑田 学(東京大学・学術研究員)

1. 問題の所在

第一次大戦後の混乱の只中で刊行されたオットー・ノイラート(Otto Neurath, 1882-1945)の『戦時経済を通して自然経済へ』(1919)は、出版とともに M.ウェーバーや L.v.ミーゼス、後には F.A.ハイエクからの激しい批判を招き、両大戦間期の「社会主義経済計算論争」の直接の契機ともなった日くつきの書物である。この中でノイラートは、市場による経済の支配の終焉を謳い、「自然計算 Naturalrechnung」に基づく経済過程の社会的統御(社会工学)の方向性を明確に打ち出した。以後、ノイラートは、〈自由対計画〉という「短い 20 世紀」を支配した常識的な二分法の中でもっぱら解釈され、粗野なサン＝シモン主義者、テクノクラートとのレッテルを貼られてきた。

ところが近年、こうした評価に変化が生じてきた。1983 年の *Philosophical Papers* の出版を契機に、ウィーン学団唯一の社会学者であったノイラートの認識論や哲学の異端さが注目され始め、さらに 2004 年の *Economic Writings* と出版とともに、彼の経済思想の多様な側面に光が当てられるようになってきている。とりわけ後者の動向を牽引したのは「エコロジー経済学」の思想系譜への位置づけである(Martinez-Alier 1987; O'Neill 1999; Uebel 2005)。ノイラートが、経済計算論争において、市場価格や計算価格では捉えられない資源やエネルギーフローなど経済の物質的な局面や枯渇性資源の世代間分配の問題を取り上げ、経済合理性を形式・計算合理性に還元する見方を「似非合理主義」として一貫して退けていた点が注目されたのである——その意義は K.W.カップによっていち早く言及されていた。また「赤いウィーン」における食糧供給・住宅建設を軸とする「共同経済」の再建への取り組みや、経済過程の社会的制御(Sozialisierung)と生産手段の所有関係の変革(Vergesellschaftung)との切り分けなど、ノイラートの社会化構想についても、素朴な中央集権的計画経済には解消されないその複雑な性格が注目され(Cartwright et al. 1996; 小林 2012)、アンシェイショナリズムとして再読する試みも生まれている(O'Neill 2003; Vossoughian 2008)。

だが、こうして経済計算や社会化に関わる諸論考の再検討が進む一方、1920 年代という早い段階でなぜ彼がエコロジー経済学にもつながる問題を立てるに至ったのか、それがノイラートの経済思想・哲学にどの程度内在する視点であったのか、必ずしも十分に論じられてこなかった。本報告が照準するのはこの点である。とくに世紀転換期に生じた力学的・機械論的自然観の崩壊という科学的認識の転換に着目しながら、〈経済〉についてのノイラートの思考モチーフを考察することが本報告の狙いである。

2. 力学的世界の崩壊——不可逆的現象としての〈経済〉

19世紀中葉に、エコロジー経済学の生誕にもつながる、科学的な自然認識の大きな転換が生じ始めていた。一方ではS.カルノーに始まる熱力学・エネルギー論が飛躍的な進展を見せ、他方ではC.ダーウィンやE.ヘッケル以来の進化論やそれに連なる生態学的思考が形成されつつあり、両者が19世紀の物理学界を支配していた力学的・機械論的自然観に大きな亀裂を生じさせたのである。とりわけ熱力学は、摩擦や不可逆性の原理を導入する点で、古典力学の決定論的な可逆的世界像とは根本的に対立する内容を含んでいた。

重要なのは、熱力学による自然像の転換によって、自然における生命の位置が問い直されるとともに、〈経済〉もまた物質とエネルギーの不可逆的な変換と劣化の現象から自律的に運動する「永久機関 perpetual motion」と見做すことが不可能となったことである。ドイツの化学者ヴィルヘルム・オストヴァルトやイギリスの物理学者フレデリック・ソディなどいわゆる「社会エネルギー論 social energetics」の論者は、経済過程を太陽エネルギーの不可逆的な変換過程として把握し直し、産業を急激に膨張させ、富を蓄積する一方、莫大なエネルギーを浪費し、大量の貧民を生み出す同時代の資本主義の不安定性を熱力学の視点から分析し始めていた。社会エネルギー論の試みはウェーバーやハイエクによって「物理学還元主義」や「一種の反・経済学」として批判されたが、N.ジョージesk＝レーゲンの『エントロピー法則と経済過程』(1971)へとつながる熱力学をベースとした経済学の系譜がここに端を発しているのは確かである(Mirowski 1988)。エネルギー概念による諸科学の統一を構想したオストヴァルトが、エルンスト・マッハの支持を得て、L.ボルツマンと苛烈な論争を展開したことは科学史では有名であるが、彼のエネルギー論は当時、ボルツマンのアトミスティック(原子論)とドイツの物理学界を二分するほどの影響力を持っていた。

ちょうどこの時期、ノイラートは、ベルリン大学の古代史家E.マイヤーや経済学者G.シュモラーの下で古典古代の経済観を論じた学位論文を書き上げ(1906年)、故郷ウィーンで、物理学者P.フランクや数学者H.ハーンとともに、後のウィーン学団の母体となる非公式の会合「第一次ウィーン学団」(Haller)を組織していた。この会合では、マッハやフランスの物理学者ピエール・デュエムなどの著作を中心に、当時の自然科学と社会科学の方法論や認識論をめぐる状況について討究された。その際、彼らがマッハの経験主義に信頼を寄せたのは、エネルギー論や進化論の登場によって力学的自然観の土台が大きく揺らぐ一方、これと並行して有機体論や神秘的な自然哲学が流行するようになり、いずれとも異なる科学的な世界認識が求められていたからであった(Dvork 1996; 後藤 2000)。ノイラートはオストヴァルトの極端なエネルギー一元論の哲学には与しなかったものの、力学的世界観の崩壊はこの時期に開始されたノイラートの経済学の理論研究にも少なからぬ影響をもったのである。

3. 「交換」から「富」の理論へ

ノイラートが第一次ウィーン学団を組織していた頃、彼は「戦時経済」の実証研究と並行して経済分析の新たな理論枠組みの構築を試みていた。「社会科学の理論について」(1910)、「政治経済学と価値論」(1911)、「自然経済学、自然計算、その戦時経済学との関係」(1916)、「経済理論の概念構造とその基礎」(1917)、「将来の経済秩序と経済科学」(1917)などの論考がその主要な成果である。彼は、ベルリン大学で師事したシュモラー率いる歴史学派の強い影響下に置かれていたが、ウィーンではベーム＝バヴェルクが主催するセミナーにも参加しており、オーストリア学派の経済思想の圏内から完全に自由であったわけではない。むしろシュモラーとメンガーの方法論争に見られる「歴史」と「理論」の対極的な分裂をいかに克服するかという同時代の社会学者の課題を彼も共有していた。そしてこの分裂を乗り越えるためにノイラートが依拠したものの一つが、力学的自然観に対するマッハの認識論的な批判であった(Nemeth 2007; 2013)。

マッハは『力学史』(1883)の序文で、「力学現象がいかにして認識されたかを歴史的に分析すること」が力学の思想の核心に迫る最も有効な方法であると書いたが、ノイラートはこうしたマッハの「歴史的・批判的方法」を引き継ぎ、いかにして現在の〈経済〉の認識が造形されてきたのか、そして人為的につくられた経済学の諸概念によってアモルフな現実から何が切り取られ、何が失われたのかを歴史的に分析することが、「ものの見方を解放する」すぐれた理論研究の方法と考えていた。ノイラートは、自らの経済学の課題を、「経済活動のあらゆる可能的形態に対等な理論的扱いを原理的に提示することのできる経済理論の一貫した構造を練り上げる」(Neurath 1917a/2004, p.312)ことに定めたが、その狙いは、古代の自然経済から近代の自由交換経済、そして当時の戦時経済体制に至るまで、多様な経済形態の「比較」という方法を通して、市場の法則性の記述に純化した同時代の経済学を徹底して相対化することであった。

ノイラートは、「社会科学の理論について」のなかで、早くも経済学の問題を交換の科学＝「カタラクティクス」に還元する見方を批判している(Neurath 1910)。マッハは、ニュートン力学に潜む「形而上学的なもの」、すなわち「原子」や「分子」といった不変の実体、またこの実体の運動が展開される場としての「絶対空間」や「絶対時間」といった概念を形而上学的なものとしてその解体を企てたが、ノイラートは、この原子や分子といった実体が、「ホモ・エコノミクス」や測定可能な量としての「貨幣」、またこれらが展開される場としての「市場」といった諸概念に姿を変え、経済学に持ち込まれていると見ていた。とりわけ貨幣という単一の価値尺度によって合理性が測定されるという前提は、すでに科学の領域で否定されたはずの「ラプラスの魔」の神話に囚われた見方であった。こうしてホモ・エコノミクスと定量的方法が緊密に結びつくことで、経済科学の対象が市場交換と価格形成の理論へと狭く絞り込まれると同時に、市場の外延に存在する広範な「富の移転」(贈与や暴力的領有、戦争、環境的諸条件の変化など)を排除することに帰趨したとノイラートは批判する。そこで、自由市場の分析に制限されないより一般性の高い理論枠組みを練り上げるために、「交換」に代わって主軸とされたのが、「もっとも広い意味で人間が

『生産』し『消費』するもの」と規定される「富 Reichtum」であった(Neurath 1917a/2004. P.340)。

4. フェリシトロロジー—〈地質学的主体〉としての人間とその生の条件—

ノイラートは、「生活基礎 Lebensboden」、「生活秩序 Lebensordnung」、「生活条件 Lebenslage」、「生活の質 Lebensstimmung」という四つの局面から、「富」の成り立ち、すなわち人間の具体的な生の良さ・幸福を構成し条件づけている諸要素の複合的な相互作用とその通時的な変化を考察する。彼が自らの経済学を「フェリシトロロジー(幸福学)」と呼んだ所以である。ここにノイラートの描出する〈経済〉の原像を見いだすことができる。

【生活の質】：人間集団の構成員の幸福と苦痛＝効用(食べること、飲むこと、読むこと、美的感受性、宗教的観想、道徳的思索、愛すること、嫌悪することなど、あらゆる経験と接続される)。

↓

【生活条件】：「幸福の内的条件」。住居、食糧、衣服、教育、娯楽、仕事、病気、労働時間、余暇時間、良好な人間関係、友情、市民的自由、「大洋性の感覚 oceanic feeling」など。

↓

【生活秩序】：個々人や集団を特徴づける人間の意識的および無意識的な行為、振る舞い、慣習、制度。とくに生活の質に影響を及ぼす制度の総体は「経済秩序」と呼ばれる。同一の生活基礎から、より多くの生活の質を生み出す経済秩序が、より経済的に合理的・効率的と言われる。

↓

【生活基礎】：「幸福の外的条件」。最広義の物理的な環境、すなわち生態学・地勢学的諸条件、領土、あらゆるエネルギー源、森林、沼地、河川、岩場、土壌、大気、人間の能力、動物、都市、運河など。

「生活の質」とは人間の多岐にわたる経験と結び付いた喜びや苦しみの感情の総体である。「社会的エピキュリアン」を自称したノイラートであるが、早くも「快樂極大化問題」(1912)において、質的に多様な快樂を量化することの妥当性を批判し、基数による快樂計算や個人間・集団間の比較可能性につき否定的な立場を取った。この論考の後、ノイラートの関心は主観的な経験の直接把握ではなく、快樂や苦痛を創り出すところの多様な諸要素、すなわち具体的な人間の生活・生存を成り立たせている物質的および社会的な諸関係の方に向けられるようになる(物理主義 Physikalismus の視点)。幸福の「内的条件 Innenlage」とも呼ばれる「生活条件」の概念がそれである。その特徴として以下の二つの点に注目したい。

一つは、生活条件の内的な多元性である。ちょうどマッハが原子や分子といった質点の力学運動ではなく、色・音・熱・空間・時間等々の感性的諸要素の函数的な依属関係の項として現象を捉えたように、生活条件は相互に還元不可能な多様な要素から構成された布置連関、「多次元的構

造」として捉えられる。それは食糧や住居といった身体的・物質的な条件のみならず、労働時間や社会的協同や市民的自由といった、いわば社会関係の質や広義の制度とも結びついている。また、各要素の布置連関として生じる「異質なるものの全体性」が問題となる以上、生活条件は単に個々の要素の算術的総和ではありえず、貨幣量のような単一の共通分母に還元可能なものでもない。そのため生活条件の分析にはパレートやエッジワース流の「幾何学的な表象」ではなく、諸要素の具体性・固有性とともにもその相互関係を記述・表象する方法が必要とされた。出生率、死亡率、栄養状態、住宅の割り当て、労働時間、財の消費、エネルギー消費など多岐にわたる「社会状態」を統一的な視覚化方式によって表現しようとするアイソタイプ ISOTYPE は、「生活条件の地勢図」を記述する一つの試みであったといえる(Leonard 1999; Nemeth 2011)。

第二に、「生活基礎」への埋め込みという局面である。ノイラートは、ドイツの地理学者フリードリヒ・ラッツェルの『人類地理学』を参照しつつ、人間の生存を支える物質的・社会的関係の根底に、自然資源や生態学的な相互依存関係が存在していることを捉えていた。幸福の「外的条件 Sachlage」とも呼ばれる生活基礎は、文字どおり「Lebensboden=生の根源的な土壌・大地」として、「最広義の環境」を指し、大気、森林、原野、沼地、河川、土壌、またそこに生きる動物や植物や微生物を含む生態学的な諸関係や諸条件、またさまざまな鉱物や資源の供給源、全エネルギーの供給源、そして人間の能力や運河、都市といった人工物から構成される。「人間集団は、生活基礎のなかに埋め込まれ eingebettet、これに規定され、かつこれに影響を及ぼす。〔中略〕社会は、それ自身一部として属しているその環境の諸条件によって規定される構造として現れる」(Neurath 1931/1973, pp.392-3)。もっとも、こうした自然的条件の重視は素朴な環境決定論と一直線に結び付くわけではない。人間の慣習や秩序のあり方は生産力の増大とともに、自然の物理的な秩序や法則から相対的に自由に変質・変容しうる。しかし、いくら生産力が高まろうとも、社会が多様な自然的条件との複雑な相互関係の項として成り立ち持続することに変わりはない。

このような経済の生態学的な埋め込みの視点は、最晩年の『社会科学の基礎』(1944)では、同時代の動物生態学や人類生態学の研究成果を参照しながら拡充されている。たとえば人間が形成する社会制度は、「シヌジア synusia」なる生態学の術語を援用して表現されている。シヌジアとは、他の動物、植物、森林、微生物、大気、海洋、気候等々の複雑な相互依存関係が織り成す凝集体(=ヒトという種の生態系)にほかならない。「われわれは—生物生態学 bio-ecology がそうするように—、生物とその環境とのアンチテーゼではなく、人間、動物、植物、土壌、大気等々から成る『シヌジア』から出発する。この言葉は『シンバイオシス symbiosis』とのアナロジーで用いられる」(Neurath 1944, p.20)。ここでは、人間も大いなる自然のうちに生きる一つの生物種として、すなわち、さまざまな物理的な富・資源、食糧、気候、地勢、土壌など、多様な自然事物とのきわめて複雑な相互関係や絡み合いのうちにある「地質学的主体 geological agent」として相対化されるのである。

5. おわりに

ノイラートの経済学に特徴的なのは、〈経済〉の成り立ちを、さまざまな社会関係や制度だけでなく、自然生態系によって形づくられる物質的な相互依存関係の次元にまで広げて捉えようとする広角な視点である。こうしたノイラートの〈経済〉の認識は、統治の問題すなわち両大戦間期を通して、彼が社会主義の立場から一貫して自然計算を擁護し続けた事実と無関係ではありえない。ノイラートは、貨幣計算によって測定・評価される「収益性 *Rentabilität*」と、人間の生存を支える社会的・自然的諸条件を踏まえた「経済性 *Wirtschaftlichkeit*」という二つの合理性概念を切り分けた上で、社会化を通じて後者の方向での経済の合理化を目標とした。そのため一般に自由主義が政治や社会からの市場の自律性を純化させる方向を求めたのとは対照的に、経済領域に科学共同体や専門家集団、そして政治(=民主主義)を媒介させる経済の統治形態を模索した。ウィーン学団が追求した「統一科学」のプロジェクトも、少なくともノイラートにおいては、〈経済〉の組織化と統治というきわめて実践的な問題と結び付いた形で登場していたのである。

ジョージesk=レーゲンは、『エントロピー法則と経済過程』のなかで、経済学の射程を財とサービスの生産・消費という狭義の経済過程から、そのような経済過程そのものを存立させる再生産可能な条件・過程へと拡大させることの必要性を指摘していた。社会主義計算論争におけるノイラートの位置を再考する際にも、自由か計画(介入)かといった単純化された二分法から距離をとり、こうした広義のパースペクティブを踏まえておくことが重要である。

※詳細な参考文献は報告時に配布させていただきます。

Cartwright, Nancy et al. [1996] *Otto Neurath: Philosophy between Science and Politics*, Cambridge University Press.

小林純 [2012] 『ドイツ経済思想史論集 I・II』 唯学書房。

Leonard, Robert J. [1999] “‘Seeing Is Believing’: Otto Neurath, Graphic Art, and the Social Order,” *History of Political Economy* 31(supplement): 452-78.

Martinez-Alier, J. with Schlüpmann, Klaus. 1987/1990 *Ecological Economics: Energy, Environment and Society*, Oxford: Blackwell, with new introduction.

Mirowski, Philip. [1988] “Energy and Energetics in Economic Theory,” *Journal of Economic Issues* 22/3: 811-30.

Nemeth, E. Schmitz, S.W. Uebel, T. (eds.) 2007 *Otto Neurath's Economics in Context*, Springer.

Neurath, Otto. 1944 *Foundations of Social Sciences*, The University of Chicago Press.

Neurath, Otto. 1973 *Empiricism and Sociology*, Edited and translated by M. Neurath and R.S. Cohen, Dordrecht: Reidle.

Neurath, Otto. 2004 *Economic Writings: Selections, 1904–1945*, Edited by T.E. Uebel and R.S. Cohen, Dordrecht: Kluwer.

O'Neill, John. 1999 “Ecology, Socialism and Austrian Economics,” in E. Nemeth and R. Heinrich (eds.), *Otto Neurath: Rationalität, Planung, Vielfalt*, Weiner Reihe, Vienna.

O'Neill, John. 2003 “Socialism, Associations and the Market,” *Economy and Society* 32/2: 184-206.

Uebel, Thomas E. 2005 “Incommensurability, Ecology, and Planning: Neurath in the Socialist Calculation Debate, 1919-1928,” *History of Political Economy* 37/2: 309-42.

Vossoughian, Nader. [2008] *Otto Neurath: The Language of the Global Polis*, NAI Publishers.